

申請者	学科名	保健福祉学科	職名	講師	氏名	趙敏廷
調査研究課題	介護職員の自己成長に関する基礎研究 －介護福祉養成施設を卒業した介護福祉士の成長過程に焦点をあてて－					
調査研究組織	氏名	所属・職		専門分野	役割分担	
	代表	趙敏廷	保健福祉学科・講師	介護福祉	調査・分析・執筆	
調査研究実績の概要	<p>1. 研究の背景と目的</p> <p>厚生労働省の福祉人材確保対策検討会（平成26年）の資料によると「団塊の世代が75歳となる2025年までの課題として、約250万人の介護を担う人材を確保する必要があると示している。内閣府が実施した「介護保険制度に関する世論調査」（2010）によると、介護の仕事に対する否定的なイメージが根強く新規参入の阻害となり、介護人材不足の一因となっている。その背景として介護の仕事がもつ魅力など肯定的な側面について十分検討されていないことが指摘されており、今後は介護の肯定的な側面を社会に発信していくことが必要である。</p> <p>Kramer,B.J.は介護の肯定的な側面を探求することの意義について介護の質の向上や個人の成長をあげている。介護福祉士は「自分の人間的な成長に役立つ」と考えており（日本介護福祉士会2015）、介護職員が成長を実感することは仕事継続意志への影響の可能性も期待できると考える。しかし、介護職員における自己成長の概念はまだ十分検討されておらず、成長過程については明らかになっていない。</p> <p>そこで本研究は、介護の肯定的な側面を社会に発信していく上で有用な資料として、介護専門職として期待されている介護福祉士を対象に、介護に従事するなかで経験する自己成長感はどのようなものか、また実務経験の経過とともにどのように自己成長を成し遂げているのか、その過程を明らかにすることを目的とした。</p> <p>2. 調査対象及び調査期間</p> <p>調査対象者は、介護福祉士養成施設を卒業して介護福祉士の資格を取得した介護職員とした。また、おおむね3年以上の実務経験年数を有しており、今後も継続して介護に従事したいという意向を有していることを要件とした。対象者は、機縁法により選定し、本研究の趣旨等について説明に対して同意が得られた7名の方に実施した。調査期間は、2017年2月～3月である。</p>					

調査研究実績  
の概要

3. 調査方法

調査方法は、質的帰納的な方法である。具体的には、インタビューガイドを用いて半構造化面接を行った。インタビューガイドの主な項目は、①介護にたずさわったことによって『成長』を実感したエピソードと時期、②『成長』を促してくれたと思うもの、③『成長』を実感したことによる変化などである。インタビュー内容は、調査対象者から同意を得てICレコーダーに録音した。

4. 倫理的配慮

調査対象者のプライバシーの確保に関しては、すべて匿名とし、ID番号で管理した。またインタビュー内容で個人を特定できるような情報が盛り込まれている場合は、逐語録作成後、すべて記号化し個人が特定できないようにした。調査依頼文章には個人情報の取り扱いについて明記し、研究の結果については、研究目的以外には使用しない旨を明記すると同時に口頭でも説明を行った。なお、本研究は岡山県立大学倫理委員会に審査を申請し、承認を得て実施した（受付番号16-60）

5. 分析の手続

分析方法は、まずICレコーダーに録音された音声データをもとに逐語録を作成した後、質的分析ソフトMAXqdaを用いてコード化する。続いて、語られた内容を比較検討しながら概念を抽象化し、コードからカテゴリーを生成する。

6. 結果

調査対象者の概要を以下に示す。

ID	性別	年齢	最終学歴	保有資格	実務経験年数	勤務先の種別	現在の職位
A	女	20歳代	福祉系大学	介護福祉士, 社会福祉士	3年	特養	ユニットリーダー
B	女	40歳代	福祉系専門学校	介護福祉士	9年	老健, デイ	介護リーダー
C	女	20歳代	福祉系大学	介護福祉士, 社会福祉士	3年	老健	介護職員
D	女	20歳代	福祉系大学	介護福祉士, 社会福祉士	3年	有料老人ホーム	介護職員
E	女	30歳代	福祉系短大	介護福祉士, 介護支援専門員	11年	老健, デイ	管理者
F	女	20歳代	福祉系高校	介護福祉士	5年	特養	ユニットリーダー
G	女	20歳代	福祉系大学	介護福祉士, 社会福祉士	6年	特養, デイ	介護職員

引き続き、介護職に携わるなかで実感する自己成長感の概念を整理し、介護福祉士養成施設の養成課程や勤務年数による特徴をについて分析を進めていきたい。

成果資料目録

平成29年度に学会発表を予定している。